

統合失調症を煩った患者に恋愛感情を向けられた精神科女性看護師の感情体験

清水隆裕^{*,1)}、入江拓¹⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学

【目的】精神科病棟の看護師にとって、患者から好意を示され、そのような対象としての関係性を要求されることはしばしば経験される現象である。先行研究により、患者側の要因として、不安感からの逃避、恋愛妄想、陽性転移、依存心の変形などが検討されているが、看護師側の感情体験は明らかにされていない。本研究の目的は、精神科病棟に勤務する女性看護師が、統合失調症の患者から好意を向けられることによって、どのような感情変化のプロセスを体験しているのかを明らかにし、そのような状況に対峙しつつも看護師が自身の安全を守りながら治療的関係を維持するための方策に関する基礎情報を得ることである。

【研究方法】精神科経験年数1年以上で、A県内の精神科女性看護師6名を対象とした。インタビューガイドを作成し、統合失調症の患者に好意を向けられたときの感情体験について1名につき1回約60分の半構成的インタビューを行った。インタビューは同意を得てICレコーダーに録音した。インタビューは録音後、逐語録を作成しデータとした。逐語録を意味ある内容ごとに切片化しコード化した後、内容の類似性に沿ってサブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化し、カテゴリー間の関連性を検討した。

【結果】統合失調症の患者から好意を向けられることによる精神科女性看護師の感情体験を分析した結果、281のコードから55のサブカテゴリーを経て18のカテゴリーを抽出した。以下は《》をカテゴリーとする。女性看護師は、好意を向けられるとまず《アプローチに対する驚き》を経験していた。その後《患者に自分が脅かされている感覚にとらわれる》と、身の危険を実感していた。しかし、実際の身に危険がないと理解できると《行動化しないと自分が理解できれば警戒がうすれる》が、反対に理解できない場合は《際限なく行為がエスカレートする恐れを実感する》ことになっていた。その後は《患者の変化を断念する折り合いとして防衛的になる》ことで感情の乱れを守っていた。患者の退院・転棟時には、時として《患者がいないことに対する虚脱感》を体験していた。また、その感情の変化のプロセスの最中には恒常的に《偏見を持つ人としての自分を見つめることへの抵抗感》《病気に対する同情心》《他者にやり取りを見られることが恥ずかしい》《女性として評価された嬉しさ》《患者から好意を向けられる看護師としての安堵感》《看護師の仕事がやりにくくなる煩わしさ》《看護師としてのアイデンティティのゆらぎ》《付き合うことがないという自覚》を体験していた。また、チームメンバーに対する感情として《チームメンバーに苦しみを理解されるとありがたい》《自分の看護能力を評価されることへの恐れ》《患者をコントロールできない上司・医師に対する不満》《具体的な内容を情報共有されることの負担感》を経験していた。

【考察】精神科女性看護師は、統合失調症の患者から向けられた好意に対して主に自分自身に危機が迫っていると体験し、その感情体験は、患者から暴力を受けた精神科看護師の主観的体験と類似しており、かつ患者が退院した後も高い不安感が持続するといった、二次的外傷性ストレス障害様の反応を呈する場合もあった。以上のことから少なくとも女性看護師にとって、恋愛感情を向けられることによる感情体験は、精神科看護師としての大きな揺さぶられ体験になっていることが推測される。本研究の知見は、看護師の脅かされる体験の予防及び、衝撃を受けた女性看護師のケアのために活用可能であり、チームメンバーは同僚女性看護師が危機的体験を受傷している可能性を考えて、サポートシステムとしての機能や、情緒的な精神的な支えを提供してゆく必要があると考えられる。

* 2013年11月日本精神科医学会学術大会にて発表予定。